総合学習	環境問題のコラムを書こう

【取り組みのねらい】

限られたスペースに簡潔に短く意見がまとめられている新聞のコラムのように記事（400字）を書くことにより、環境問題の本質について考え、自分の意見を相手に伝えるための力（コミュニケーション能力）を育てる。

【進め方】

(1) コラムの文章を書くにあたって、大切な3つの「C」がある。

①CORRECT（コレクト・正確）：真実性と正確性をもった文章であること。
②CONCISE（コンサイス・簡潔）：短く簡潔で読みやすい文章であること。
③CLEAR（クリアー・明快）：わかりやすくやさしい文章であること。

(2) 地球的規模での環境問題や自然について考える場合には、長期的な視点やお互いのつながりとその影響など大きくとらえることが必要である。

〈環境問題における4つの大切な視点〉

①DIVERSITY（ダイバーシティー・多様性）　②HOLISTIC（ホリスティック・全体性）
③CONCERN（コンサーン・関係性）　④SUSTAINABILITY（サステーナビリティー・持続可能性）

(3) 環境問題では、常に積極的な問題発見型、問題解決型のアプローチが求められる。

〈環境問題における4つの大切な考え方〉

①CRITICAL THINKING（批判的に考える）　②LOGICAL THINKING（論理的に考える）
③CREATIVE THINKING（創造的に考える）　④VALUE THINKING（価値的に考える）

〈「文章の流れ」として、下記のような例を示しておくと生徒は書きやすい〉

①（問題の提示）「○○○は、本当に○○○だろうか?」
②（結　　論）「私は、○○○と考える」
「私は、○○は△△であるべきであると考える」
③（理　　由）「なぜなら、○○○は、○○○だからである」
「たとえば、□□□はその例である」
④（具　体　例）「具体的には、○○○‥‥、○○○‥‥などが挙げられる」
⑤（結論の再確認）「このように、私は○○○…と考える」
「このように、○○○…が考えられる」

大自在

「淡い光、ホタル乱舞　ガイドツアー楽しむ」。今月に入り、県内各地のホタル鑑賞会の記事が目立つ。ことしは空梅雨で少雨のせいか、個体数は例年に比べやや少ないとも聞くが、人工の光とは違う幻想的な明滅を楽しんだ人は多いだろう▼ホタルは世界に約2千種、日本には約50種が確認されている。このうちゲンジボタルはきれいな水辺に生息。昔から文学や詩歌にしばしば登場する。「安らぎや癒やしをもたらす光」。東京・板橋区ホタル生態環境館館長の阿部宣男さん(57)は、息づくような発光をこう表現する▼板橋にホタルを呼び戻そうと開設された同施設のゲンジボタルは、福島県大熊町が故郷。1989年、阿部さんが母親の実家近くの熊川で採取した約300個の卵が、世代交代を繰り返してきた。他の地域の幼虫などを交えず、大熊町の遺伝子をつなぐ▼実家は福島第1原発から歩いて15分ほど。原発マネーで河川が改修される前、ゲンジボタルの乱舞は「降りしきる粉雪のようだった」。東日本大震災の津波で実家は土台しか残っていない。大熊町は全町民が原発事故で、あの日から避難生活を送っている▼昨年6月、阿部さんは大熊町で、町職員らとホタルを探した。熊川支流で4匹を採取。このうち2匹は発光体を失うなどの奇形だったと阿部さんから聞いた▼放射線量が十分低くなったら、阿部さんは板橋のゲンジボタルを大熊町の川に放ちたいと話す。「ホタルが住める環境に戻れば、人も帰ることができる」。ゲンジボタルの乱舞が大熊町に戻る日を心待ちする。

平成25年（2013年）6月19日（水曜日）朝刊

クラス（　　）　NO（　　）　氏名（　　）

タイトル「　　」